



## 「日本文学盛衰史」

高橋 源一郎著

文学とはなにか。明治維新後、この日本において近代文学は、どのような人間のいとなみのうちになされてきたか。この作品は一見、多くの過去の作家と作品を批評しながら、実は作家本人もふくめ、百年という単位でその連なりをすくいとり、一編の詩的な小説世界をつくりあげようとする姿がみられている。

言文一致の二葉亭四迷をはじめ、石川啄木、夏目漱石といった明治の作家たちが、現代と明治という二つの時代を交錯し合う姿はたしかに、コミカルにうつる。

たとえば生活苦のあまり自虐的に娼妓のものとへ通った啄木は、伝言ダイヤルにはまり、自然主義理論を追求しようとした田山花袋はいつのまにかアタルビデオの監督をしている。北村透谷はその根底にひそむエゴイズムをミニのスリッパドレスをほいた樋口一葉に論破され、島崎藤村はジャズ喫茶や学生運動の最中、生証人として多くの作家の心情を聞きとっていく。だが、作者は自分の内風景も入れながら、時代が移りかわっても、今なお変わらず苦悶する一個の自我を持つ作家が存在することを痛切にうたいつづける。

それはこの作品の執筆途中、作者本人が実際に胃潰瘍を患い、そのままタイムスリップし明治の長与病院に連れて行かれ、そこに修善寺の大患で伏せる漱石と相部屋となることで決定的となる。漱石の作品中、唯一『坊っちゃん』をのぞき詩の面影は失われ、小説は、あくまでも日常を生きる「生」の側に属したと言ふ。詩に対する作者の特別な思いが告げられ、病にある身では正直、あなたの小説と向き合うことはできなかったと吐露させてしまうのだ。死の危機にあっても、散文家として淡々と市中の人たちへ「生」の言葉を紡ぐしかない二人は、時代を超え、同じ枷を背負っていることがつたわってくる。

未曾有の可能と不可能をもった作品の群れ。最終章の明治の作家たちの多くの死を知らせる当時の記事の列挙は虚しくも重く胸をおおっぱかりだ。近代以降、表現のための言語の獲得から始まった文学は何を得、失ってきたのか。作者は真摯にそれを問おうとしている。

評・宮本誠一（小規模作業所「夢屋」代表）

## 苦悶する作家の存在うたう